

○ 緒言

土木・建築の建設事業が生み出す構築物が、既存の自然地形と景観的に調和するとは、一体いかなる状態をさして言うものであろうか。恐らくそれはただ単に構築物が目立たないということには限定されない多様な解を持つ問いであろう。そのことは景観評価の多次元性、即ち人間心理の多元的構造に根ざす価値体系の多様性を思えば、至極当然のことのように考えられるが、これを直ちに嗜好性の問題として短絡させる発想からは自由でありたい。景観を公的な財の一つとしてもし考えるならば、数々の次元の中から人間の知覚の根底に於いて共有し得るものも尺度として選定することは一つの出发点となり得るであろう。調和性の問題を最適化と関連付けて考える限りにおいては価値的な多様性の問題にぶつかるが、調和性を確保するための最低限度もしくは境界値を見出すことはあながち困難な課題とは言えない。注意すべきことは、総体的な調和性の問題が知覚の総体性と不可分でありながら、我々の方法は個別の次元についてしか取り扱えないことである。景観を視覚的ゲシュタルトとして捉えれば、最も基本的な知覚の次元は形態とスケールである。今回は主としてスケールの境界値の導出と、総体的な破壊感の計測を、一連の心理実験を通じて試み、自然地形を背景とした構築物のある景観の“図”の構成について考察している。

○ 実験概要

構築物がその第1次の背景とする自然地形としては丘陵もしくは台地縁端部が多いと考えられることから、スカイラインがほぼ水平にのびている台地地形の景観写真を選出し、心理実験用モニタージュ写真の背景とした。前景としては“図”としての干渉要素が少ない平坦な草原を採用し、背景までの距離を2種類とした。(近距離=A系列、遠距離=B系列(距離が倍))これに対して、外壁面に窓等の2次のな“図”となる要素を含まない均一なテクスチャのコンクリート造構築物モデルを合成し、カラースライド写真として呈

示刺激とした。(合計A系列84枚、B系列66枚)構築物モデルは平坦地に建つものとし、矩形の輪郭線をもつ単純な形態のものを正面ファサード方向から見る場合を想定して、構築物の高さ及び横巾を変えている。各系列其横巾を6段階に分け、実験群(A-1~6、B-1~6)を構成し、各20名の被験者に、プロジェクターでスクリーン上に投影した映像を呈示刺激として見せ、背景に対する構築物の大小感(7段階評価尺度)及び景観破壊度(0~10)の回答を求めた。

○ 実験結果

スケール感の境界値(図-1a,b)に関しては、近距離の場合及び遠距離の場合の両者に共通する傾向として、横巾が狭い場合(A-1, B-1等)の方が、広い場合(A-6, B-6等)より高さ比によるスケールの境界値が大きいことがあげられる。これは見えの面積の影響が衰えていると言うよりも、ファサードの形態即ちプロポーション(高さ/横巾)の影響と見るべきであろう。図-2a,bは同一プロポーションを持つ呈示刺激に対する評価の平均値を追跡したものであるが、平坦なプロポーションの方がスケール感に関しては厳しく評価されることがわかる。この図で観察される他の事実は、プロポーションが大きく縦長になってもスケールの境界値は高さ比で2.0前後に留まることである。これは“図”としての一種のバランスの限界を示すものと考えることができよう。

景観破壊度(図-3a,b)については、両系列に共通の傾向として、スケールが2.0前後の所に評価曲線の「落ち込み」が見られることがあげられる。これは呈示の順序効果によるものではなく、各実験群に共通して衰えている事象から、高さ比で2.0前後のスケールには特段な意味があることを裏付けていると考えられる。即ち、この時“図”としての背景と構築物との関係が対等になっていると言えよう。

上掲両尺度の関係はほぼ直線的で、単極性尺度として考えた景観破壊度は実際にはほぼ5を中立点とする両極性尺度として構成されていた。

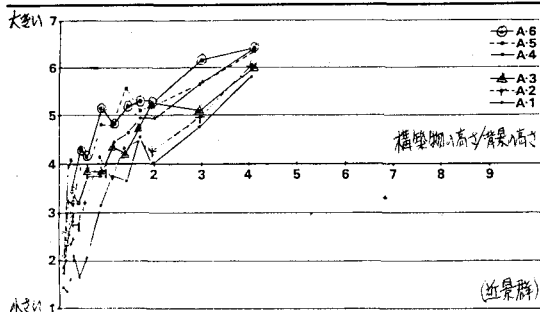


図-1a スケールの評価曲線 (平均値表示(以下同))

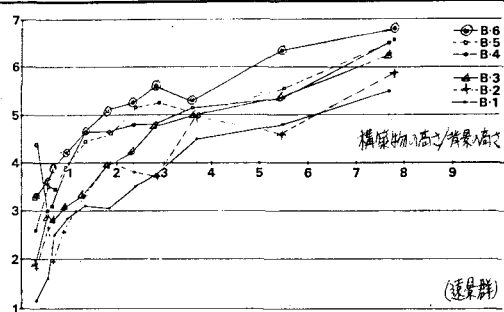


図-1b (同左)

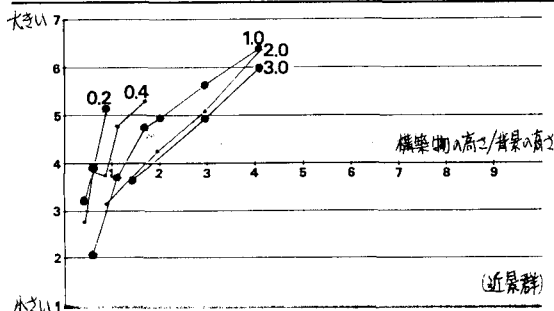


図-2a 構築物のプロポーション別の評価曲線

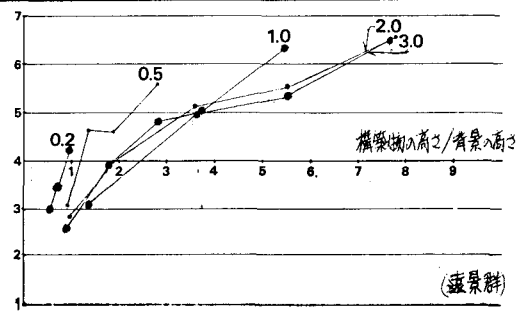


図-2b (同左)

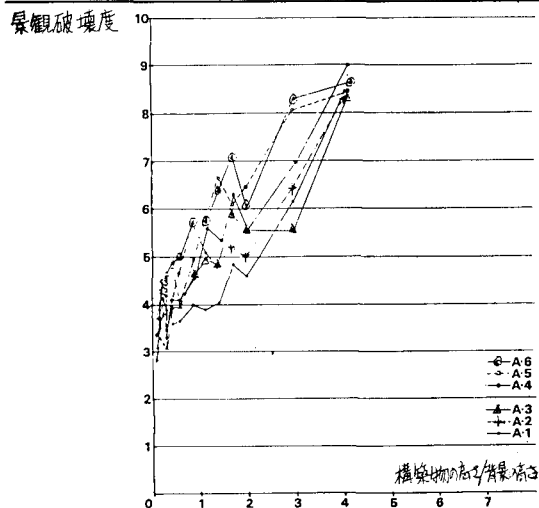


図-3a 景観破壊度に関する評価曲線

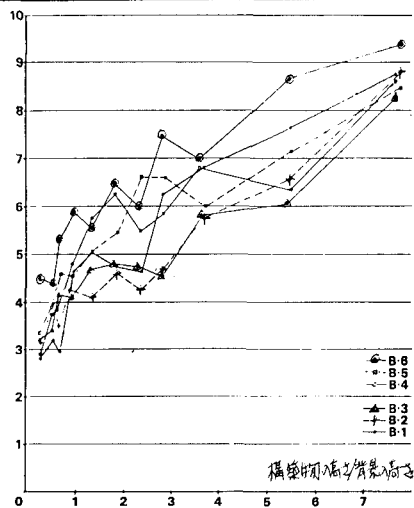


図-3b (同左)

○ 結語

景観の調和性の問題を知覚的レベルにおける下限値の形で扱う立場に対しては少なからぬ異論もあろうかと思われるが、もとより唯一解を求め得ない対象に関する基準としては止むを得ない側面もある。調和性の対極として破壊感を設定したのも、受忍限度の形での分析の可能性を検討するためであるが、スケールの境界値との対応性が見い出せたことは、モデル的・初

歩的段階ではあるが一応の成果である。しかし、景観という“因”的対象の認知構成の基本はやはり形態の問題であろう。これは対象の意味(機能を含む)と密接な関係にあるものであり、テクスチャ・色彩の問題も含めて今後共追求すべき課題である。

○ 参考文献

窪田陽一(1980) = 形態とスケールを中心とした景観解析の方法に関する基礎的研究, 東京大学学位論文。